

戯曲『女人正機』

に よ に ん し ょ う き

三幕九場

天瀬裕康



時代と舞台の背景

講和条約が発効し、条件付きながら独立を回復した昭和二十七（一九五二）年当時、浄土真宗の信仰厚い、広島における佐々木家の母娘の生活から始まる。そして久子たちの上京後における、昭和三十年から五十六年にかけて、七人の広島出身者による「七の会」や「賀茂鶴会」のメンバーなどをまじえ、久子を主体として事態は進行する。それは日本が戦後を脱して高度成長に向かい、野球の広島カープが優勝し、やがて日米貿易摩擦が起ころる時代だが、佐々木久子が女の意地をかけて、日本の酒文化を護ろうとした時代でもあつた。

登場人物

佐々木久子	『酒』編集長、愛称チャコ、昭和二年生まれ
吉江 澄子	久子の妹、昭和八年生まれ
火野 葦平	久子の母、明治三十四年生まれ
梶山 徹照	正覚寺の跡取、のち住職、昭和六年生まれ
桂 季之	作家、通称カジさん、昭和五年生まれ
木村 功	作家、明治四十年生まれ
杉村 春子	俳優、大正十二年生まれ
藤原 弘達	女優、明治三十八年生まれ
政治評論家、大正十年生まれ	

阿川 弘之 作家、大正九年生まれ

石本美由起

作詞家、大正十年生まれ

小堺 照三

株式新聞社社員・作家、昭和三年生まれ

土井千代吉

杜氏、俳人、大正十三年生まれ

飲屋の女将

五十歳くらい

汽車の車掌

声だけ

汽車の乗客

数名

酒場の客

数名

場割

第一幕 第一場 昭和二十七年七月、広島市南千田町（現・

中区）の家、

第二場 昭和三十年一月、同じ場所、小雪

第三場 その翌月、中暮のまえ、背後に蒸気機関車

第二幕 第一場 上京後の貧乏時代。ハモニカ横町はずれの

飲屋

第二場 昭和三十二年春、原宿にある久子の部屋

第三場 同じ部屋。昭和三十五年一月

第三幕 第二場 昭和四十七年以後、中暮のまえでの旅

第二場 昭和五十年、東京のホテル

第三場 昭和五十六年、久子の家

第一幕

暗闇の中に読経が流れている。

薄い中幕を通して人影が写っている。読経が終りに近づき、中幕も上がる……。

幕上がる

還來生死輪轉家（げんらいしょうじりんでんげ）

決以疑情爲所止（けつちぎじょうむいらぐ）

速入寂靜無爲樂（そくにゅうじやくじょうむいらぐ）

必以信心爲能入（ひつちしんじんのうにゅう）

弘經大士宗師等（こうきょうだいしじゅうしとう）

拯濟无邊極濁惡（じようさいむへんごくじょくあく）

道俗時衆共同心（どうぞくじしゆうぐじうしん）

唯可信斯高僧說（ゆいかしんしこうそうせつ）

南無阿彌陀佛（なーもあーみだああんぶー）

何无阿彌陀佛（なーもあーみだああんぶー）……

溶明

第一場

戦後の広島、背景に原爆ドーム、手前にバラック風の家の内部を描いた絵、仏壇が見える。その手前に床の高さの台、畳が敷いてある。佐々木家の当主竜三郎が死んで丸二年が経つた昭和二十七年七月五日、三回忌の法要がすんで、雑談も終わりかけたところ。

吉江 ……（团扇で煽ぎながら）徹照様も、よいお説教をされるようになられて、皆様、ご安心でございましょう。
徹照 いやあ、まだまだ……ほんの使い走り程度でございます。代理が務まるところまでも参ります。

吉江 とんでもございません。立派なお勤めでございます。

久子 読經といい、お説教といい……

久子 子どものころを思い出しますわ。

徹照 そうですねえ、久子さんは勝気なお姉さんでした。

吉江 三つ年上でしたが、お転婆でしたよねえ。（笑い）。徹照 様はお利口で……私どもはみんな、広島県山県郡安野村の出身でございまして、先祖代々長光山正覚寺、つまり、あなた様のお寺の門徒だったでござります。佐々木の家は広島に出ましたが、先代の政吉さんなど、ずっと正覚寺様のお世話になつております。

徹照 皆さん信心深い方ばかりで、（吉江に向かって）ご主人

の龍三郎さんは、昭和二十四年に、数寄屋造りの客殿を建立寄進して下さいました。ここに泊られた本願寺の布教師様は、ご主人のような方を大工菩薩と呼ぶのだ、と言つておられました。

久子 大工菩薩という言葉は初めて聞きました。

吉江 もつたいないお言葉でございます……龍三郎は、あのあとから原爆症が進みましてね、翌年の七月五日に亡くなりまして、三回忌を迎えたわけでございます……徹照様も安野から出て大学の付属中学へ入られたので、原爆に遭われてしまふた……。

徹照 はい、全身の三分の一ほど火傷しました。全身にウジがわきましてのう……。

吉江 それが奇跡的に助かつて、龍谷大学に進まれましたが反抗的で、僧職につくことを拒否しとられるちゅうて、門徒も心配したもんですが、よう立ち直つて下さいました。しかも立派なお勤めをされるようになられて……。

徹照 いいえ、住職の偉さが少し分かりかけたところでござります。父・信登の説教には頭が下がります。

吉江 たしかに信登師のお説教は抜群でございましたが、あなた様のお話は分かり易くて、引き付けられました。

澄子 お坊さんの話つて抹香臭いものだと思つてましたが、

今日の話は面白かったわ。

久子

(澄子に) 失礼なことを言つちやあダメよ。

徹照

いえいえ、この家の方はみんな信心深いから、私のようなものの話でも、分かつて下さるのでございましょう。それでは、そろそろ(立ち上がる)……。

えんのよねえ。

吉江

そうだつたねえ。家が倒れて、火が近づいてくる……。そのとき、あの人の声がしたんよ。「久子、吉江、すぐ助けてやるぞ」ってね。

久子

家には年とつた大工さんが、四人いたのよね。兵隊に行けないほど年寄りだつたけど、父ちゃんと五人でジャッキを使って、屋根や梁^{はり}を起こして助けてくれたんよ。それから元安川沿いに歩いて逃げたのよねえ。

吉江

ほうよ、風上から風下へ火が吹き寄せてのう……地獄みたいじやつた。

澄子

私は田舎へ行つとつたけん、あのときはよう分からんけど……。

吉江

思い出しうないよ。ピカドンのあとのこととはのう。

久子

上の兄ちゃんは復員してきたけど、酒と麻雀ばかりしている。次の兄ちゃんは青年団の団長をして、復興だの平和だと頑張つてゐみたいだつたけど、私たちの生活の面倒はみてくれなかつた。男はあてにならんよね。姉さん夫婦は四人の子どもを連れて帰つてくる……いいことなしで苦労しているうちに、父ちゃんが死んだのよね。昭和二十九年七月五日、原爆症で、たくさん血を吐いてたわね。

久子 久子 でもねえ原爆のときには、お母ちゃんと私は、父さんが火の中から救い出してくれたんだから、あまり悪くも言

べやつて来て、「解剖させてくれ」と言つたでしょ。

澄子

そしたらABC、原爆傷害調査委員会つてヤツがす

久子 あのときのお母ちゃんは、強かつたわ。断固として拒

絶したものね。

吉江 みんな過ぎたことよね。辛いこともあつたが、いいこともあつた。さあ、掃除をしどきましょう……。

第一場

暗転

昭和三十年正月、以前の部屋、吉江と澄子が炬燵に入

つてゐる。蜜柑を食べながらの話。

澄子 ……久子姉ちゃん、いい人が出来てたみたいだけど、

どうなつたのかな？

吉江 N.H.K.の人のことかいね……。

澄子 そうらしいわね。あそこの職場は飲ん兵衛が多いんで
すつて……オーデリ・ヘプバーンに似てるって、……煽て
られて夜遅く帰ることがあるでしょ。

吉江 お酒のことなら心配ないよ。なにしろ四、五歳のころ
から飲んでね、平気なんだから。お酒で失敗することはな
かるうね。お父さんが派手好きで、なにかというと職人衆
を集めて宴会をしてらした。宵越しの金は持たない主義だ
けど、正月には獅子舞や伊予万歳に祝儀をはずんでね、東

京から歌舞伎が来ると、寿座の桟敷に大工や左官さんや家
族を引き連れて総見をやるんよ。春は花見で女の子には花
見小袖を慎重するし芸者さんも呼んでくるし、自分でも
太鼓を叩いてドンチャン騒ぎをしなさる……。

澄子 あつ、姉ちゃんが帰ってきたわ。

久子 (ちょっと間をおいて炬燵に入りながら) ただいま。

澄子 昔の話を聞いてたこなんよ。私はちっちゃくて、よ
く憶えていないいろ……。

吉江 久子はお転婆で、よく男の子と遊んでいたよ。サッカ

ー やドッジボールをしたり、川で泳いだりしてね……日本
舞踊も習つてたけど。

久子 (なんとなく沈みがちに) そんなときもあつたわねえ。

吉江 お父さんはね、軍部の仕事をしておられたけえ、戦争

中でも、わりと贅沢ができるんよのう……。

澄子 それで姉ちゃん、芸能が好きになつたんかいね？

久子 そうねえ……(少し話に乗つてくる) 戦後の私は舞踊教
室を開いたり、新劇をやつたりでね、県の青年演劇コンク
ール入賞したわ。東京で開かれた全国青年演劇祭でも、偉
い先生から褒められたんよ。盆踊りの指導もして、二万人
の盆踊り大会も成功させたわ。

吉江 あのころはのう、あっちでもこっちでも、盆踊りが盛
んじやつたよ。戦争で沢山の人が死んだけえね。

澄子 炭坑節をよく聞いたもんね。

吉江 お隣の呉では末永つて人が、入婿して鈴木になつたんだけど、市長さんになつてからは盆踊りに力を入れすぎたもんで、盆踊り市長と陰口されていたそうよ。

久子 私は盆踊りばかりしたんと違うけえね。昭和二十四年の五月に広島と長崎の青年交換会を作ろうということになつてね、長崎の青年団が来ちやつた。翌年は長崎の番で、次の兄ちゃんと一緒に行つたんよ。レセプロションは長崎宝塚劇場でね、私は「十三夜」を踊つたの。そしたら長崎の青年に求婚されちゃつたんよ。

澄子 ほいで、どうなつたんね？

久子 ドローン・ゲームかな。いつの間にか立ち消えよね。男には縁がないんかいなあ……永井隆博士のお見舞いに行つたら、「世界平和のため頑張つて下さい」って握手して下さつたけど、こりやあ別問題よ……。

澄子 本をたくさん書いてるお医者さんよね、『この子を残して』とか『長崎の鐘』だとか……サトウハチロウ作詞で古関裕而作曲の「長崎の鐘」もある人のことでしょ。

久子 あんた、よく知つてるのね、貧乏のどん底だったけどねえ。

澄子 父ちやんが死んでからあの数年間は、ひどい生活だったわねえ。父ちやんの気前よすぎたんで、借金のため家

も屋敷も取られてしまつた……母ちやんは山口県の建築現場で、賄婦として働いてたわねえ。姉ちやんも仕事に出だして、いろんな雑学や情報を持つて帰つたのよ。

久子 最初は進駐軍関係でね、連合軍総司令部の下に民間情報局というのがあつて、その中の青少年指導事務所というところだつた……英語が出来ないから苦労したけど、ここのはバスはイギリス軍の将校でね、これが紳士なのよ。父ちゃんとはタイプが全然違うの。

澄子 なんだか分かるような気がするわ……それからNHKに入つたでしょ。

久子 昭和二十七年に対日講和条約が発効して、連合軍関係の仕事がなくなつたんで、広島ユネスコ協会の仕事もしだけど、そのあとNHK広島の事業部でね、公開番組を手伝つたり、放送原稿の整理をしたり、まあ雑役係よ。そのうちに映画の指標を書かせてもらつたり、NHKラジオで映画や文学のお喋りをさせてもらつたり……そのうちに、ある男を好きになつたけど、（落ち込んだ感じに戻つて）振られてしまつたのよ。

澄子 （少し気遣いながら） そうだつたの。うまくいつてる、と思つてたんだけど……。

吉江 男はみんな身勝手でねえ、それに社会の仕組みが不公平等に出来とるんよ。私が嫁いできた佐々木の家も、私にと

つては生き地獄みたいじやつた。くつろいで休む時間もの

うて、朝から晩まで働かされた……嫁というのはのう、給料の要らん女中で、子どもを産むための生き物でしかなかつた。まあ日本中が、似たようなもんじやつたがのう。

久子 それにしても、よく産んだものねえ……女、男、男、

男、女、女……。

澄子 ほんまにねえ。それにお父ちゃんが、あげえた性格じ

やけえ……金が入つたらパツと使う、借金が出来ても平気……なにが大工菩薩よね。

吉江 じやけんど信心だけは、お持ちでのう、正信偈なんかは暗記しておられた。淨土真宗の教えだけが、私の心の支えじやつたよ。男女差別のある宗教は多いようじやが、淨土真宗本願寺派の教えの中には、差別はないのよう。「女人正機」いう言葉がありまひようが、「正機」いうのは、仏の教えや救いを受ける資格をもつた人のことで、女も救われるんじや。

久子 ほいでも「女人正機」いうたら、「罪深い存在である女

をまず救う」ということじやないの？ だつたら、その基には女性蔑視があるんじやないかしら？ 吉江 いいえのう、親鸞聖人の教えの中には、なんの差別ものうて、男女平等なんです。

久子 それなら仕事も、男女平等にさせて欲しいわ。……私、

東京へ行きたいの。

澄子 (驚いた風情で) お姉さん、本気ね？

久子 本気よ、職場がうまくいくてないの。

吉江 それにしても、なして、また急に！

久子 ずっと考えて決めたの……。

溶暗

第三場

中幕のまえ。昭和三十年二月初め、久子の上京。中幕にS.L急行「安芸」号のシルエット。雪がちらほら降っている。母と妹だけが見送る広島駅のホーム。

吉江 兄ちゃんたちは、ずいぶんと久子の上京に反対したよのう。なんの特技も才能もないのに、うて……じやけど、憎くて言つたわけじやあないけん、辛うなつたら、いつでも帰つてきんさい。

久子 それよりお母さんが東京へ来ればいいわ。私、兄ちゃんたちは会いたくないの。マスコミの仕事が向いてる、と言つてくれた人もいるの。

吉江 マスコミの仕事いうても、すぐありやあせんよ。私にしても、そう簡単に東京へは行けんよ。辛うても頑張つた

家じやけえね。長崎の実家へ帰りたいと、思うこともあつたよ。じやけんど、そのうちに実家の母親が死ぬと、もう帰るわけにもいかん。「女、三界に家なし」という言葉があるけど、まあ、そんなものかねえ。あの家しかなかつたんぢや。

久子 私はもう、広島にも男にも未練はないの。失恋したときには、死ぬことを考えたわ。でも、今は違う……東京に行つたら、なにかに熱中できると思うの。

吉江 広島にいても、あんたには熱中できるものがあるよ。

久子 そうねえ、樽裏金が始まつたころには、のめり込んでゆくのが私にも分かつていていたわ。でも今は、熱中できる仕事を探したいの。

澄子 私も東京へ行きたいわ。

久子 落ち着いたら呼んだげるけえね。

澄子 もつと近けりやあ、ええのにねえ。

久子 ほいでも、昭和二十五年十月のダイヤ改正でずいぶんと早くなつたんよ。「つばめ」号なら東京→大阪間が八時間で、これはもう戦前の水準に戻つてゐたわ。

澄子 でも「安芸」で東京までは、半日以上かかるじやないの。

久子 来年は改正があるので、速度だつて、もつと速くなるでしようよ。

澄子 姉ちゃんがいなくなると、寂しくなるわ……。

久子 落ち着いたら呼ぶからね。澄子、約束よ。指切りしましよう、指切りゲンマン、嘘ついたら（言いながら泣きだす）針千本……。

泣きながら話していると発車のベルが鳴る。

吉江 さあ、汽車が出るよ、（発車のベルを聞きながら）早う乗

澄子 元気でね！

久子 （中幕の重ね目から奥へ入り、涙を拭きながら、乗車する格好で）じやあねえ……。

溶暗

発車の汽笛とともに、汽車のシルエットが下手から上手に移動。それにつれて吉江と澄子も歩き、やがて上手に消える。しばらくシルエットの移動だけ。ときどき汽笛と久子のすり泣きの声。中幕の中央を一部開けて、車内の久子が見えるようにする。そこへ車内放送が流れる。

ほうに向いて、声高に告げる。

車掌 (声だけ) 広島から乗車の佐々木久子様、電報が届いています。車掌室まで取りにお出で下さい。広島の佐々木

久子様……。

久子 (涙を拭いて立ち上がる) はあーい……。(下手に向かつて姿を消す。しばらくして席に戻り、電文に目を通す) ああ、あの
人からだわ……。

山陽本線と呉線が分かれる三原駅、汽車が停まる。久子は席から立ち上がり、電報を握つて中幕のまえへ、ホームに出る。久子にスポットライト。以下、久子の独白・独演で乱れる心を表現。

久子 (電文を読み始める) ヒサコ カエツテオイデ ケツコ
ンショウ……あの人からの電報、どうしよう……(ぐるぐるとホームをうろつきながら帰ろうか……今ならまだ間に合うんだわ……あの人のこところへ戻ろうか……いや！ 帰るもんか、私は広島を捨てるの！ でも、帰りたい(しゃくり上げて泣く)

久子 昭和二十年から二十九年までの十年間、私は力一杯、青春時代を駆け抜けたんだわ。でもその最後に待っていたのは失恋だった……今となつては、お父さんだつて、恋しい。でも、広島はもう厭！ 私、東京へ行くの。広島とは、お別れよー (激しく泣きじゃくる)。

第一幕

上京後の昭和三十一年から火野葦平死亡の三十五年にかけての、波乱万丈、貧乏を乗り越えてゆく時代。

第一場

火野葦平や株式新聞社の小堺昭三のお供をして、銀座・新宿・池袋・上野・澁谷と飲み歩く久子。新宿のハモニカ横町はカウンター主体の小さな店が並んでいたが、そのはずれの「よしだ」は、広島出身者も立ち寄る居酒屋。カウンターには、背を向けた客が二、三

汽車がガタンと動き、中幕の影が揺れる。久子は汽車の昇降口を示すように開けた部分に走り込み、観客の

人。四人用のテーブルに久子たちが座っている。

小堺 承知しました。

久子 ……私ねえ、なんだか弱気になつてきたの。もう雑誌『酒』の編集はあきらめようかと思うの。先生は「頑張れ！」って言つて下さるけど……。

火野 チヤコちゃん、あんたは簡単にくたばるような女じやがないよ。お母さんや妹さんも上京されたんだろ？

久子 ええ、私が上京してから一年後、昭和三十一年に呼び寄せたんです。そしたら『酒』のほうは大赤字になつて、廃刊しかないう気がしだしたんです。

火野 だつたら、そのためにも一踏ん張りせんといかんとばかりは福岡弁じやが、お袋は広島の奥の産たい。半分は広島県の血じや。『酒』を廃刊にはさせん。

小堺 佐々木さんは、運がよすぎたのかもしねんね。上京してすぐ、二十五歳で編集長になつたんだからね。

久子 そりやもう、大谷社長のお蔭です。

小堺 社長のほうも、佐々木さんが現われたので、これ潮時とばかりに編集の席を渡したんですよ。

火野 まあ、いろんなことがあるのが人生たい。わしは別口が待つとるんで先に失礼するが、チヤコには広島軍団や酒飲みたちもついとる。(小堺に向かつて)チヤコちゃんには、わしの秘策のことも伝えといってくれ……。

火野葦平が腰を浮かしかけると、俳優の木村功が入つてくる。

火野 ちようどいい具合に広島人間がきた。交代じや。木村 なんだか追い出すみたいですが……。

火野 おまえさんに追い出されるほど耄碌もうろくはしとらんが、まあ、役者には勝てんかな。(女将に向かつて小声で)じやあ、あとは頼んだぞ……。

女将 はいはい、分かりました……お気をつけて。

木村 (火野のあとに座りながら女将に)コップ酒と冷や奴半丁で、ねばられたんじやあ儲けにはならんな。今日のは火野先生にツケとくつてことだらうが、ぜんぜん払わないことだつてあるんじやないのか？

女将 いいんですよ、そんなこと。出世払いということにしましようよ。

すると若い作家の桂芳久が入つて来る。椅子を一つ引張ってきて。木村の横、下手に割り込む。

桂 ちょっと余計なのが来たかな。まあ、同じなのを貰いま

しよう。

小堺 ちようどいい。佐々木さんが弱気になつてゐるんでね、

みんなで支援してほしいんだよ。火野先生は、生きている

限り『酒』への原稿はタダで書く、とおっしゃつた。ついでに言つと、私は先生の東京鈍魚庵の秘書になるため、株式新聞社を辞めることになりました。本格的に作家修業を

しようというわけなんだ。桂さんより出遅れたからな。

桂 僕もスランプ気味なんです。昭和二十八年の『群像』八

月号に「刺草の蔭」を発表したときには、話題になつてね、少し天狗になつたけど、あとはパツとしない。

久子 桂さんは秀才だもんね。新制の国泰寺高校時代に同人誌の『ル・アミ』を創つたわね。広島では純文学のトツ

プスターだったのよ。

桂 あれは友人つて意味です。(ちよつと講義調に)慶應の文学部へ入り、昭和二十八年には、第三次「三田文学」を復刊

して編集担当になりました。

木村 桂さんは学者のほうに向ひてゐるかもしだれんね。まあ、

金持ちでないって点では同じかもしだれんが……広島出身者

による「七の会」というのがあつたよね。広島を流れる七

本の川と、質屋通いとを絡めて七人が作つたんだ。最年長

は杉村春子さん、それから阿川弘之さん、政治評論家の藤

原弘達さん、それから私がまで大正生まれで、佐々木さん、

桂さん、梶山季之さんと昭和生まれを入れて七人です。

小堺 シチですか、ヒチですか? ヒロ島がシロ島に聞こえ

るときもありますよね。

木村 中間でしょうね、ナナではないようだけど(笑い)。大

先輩の杉村春子さんが築地小劇場を受験したときね、広島弁がひどいので、審査員の青山杉作さんが落としてしまつた。ところが、次回の作品でオルガンを弾く役が休んだので、黙つて弾くだけという条件で採用になつた……。

桂 あの人、たしか広島女学院の音楽の先生をしてらしたそ

うですね。

木村 それで助かつたんだ……僕なんかだつたら、それで一巻の終りだつた。

桂 杉村さんは別格としても、阿川くらいになると、僕らは声をかけにくくな。

木村 大丈夫さ。藤原弘達さんも三十一年に明治大学の教授

になつてから、ときどき政治討論会なんかでテレビに出て

るけど、佐々木久子応援団員にはなつてくれます。

桂 梶山季之は、すぐ動いてくれると思いますね。

小堺 じゃあこの「七の会」中核にして、輪を広げてみて下

さい。火野先生も頼んで回られます。尾崎士郎さんは賀茂鶴がお好きですが、あれは広島の酒でしょ?

久子 そうです、いい酒です。

木村

「七の会」は、これまで誰が代表という訳じやあなしに集まつたけど、この輪はいくら広げてもいい。呉市生まれの神山繁つてやつがいてね、昭和二十七年に文学座に入ってきたんだが、俳優の生活は山あり谷ありだ。こいつも呼び込もうかな。

久子

(涙ぐみながら笑つてみせて) 皆さん、有難う……。

暗転

第一場

吉江

兄さんたちも心配しどたよ。
久子 それでね、余計こと弱音は吐きとうなかつた……求人広告は水商売みたいなものばつかり。初めは青山に尚志館いうて広島大学の同窓会館みたいなところに泊つて、東京の街をほつつき歩いてね、原宿のタバコ屋さんの二階に間借りしたの。(回顧調に) 板張り三畳で、莫薺を敷いただけの部屋だけど、文句は言えんよね……そこで頑張つていたら『朝日新聞』の求人欄に、「趣味の雑誌」編集記者募集というのがあるじやない! さつそく行つたわよ。

吉江

そこが編集長にして下さつた会社かい?

久子 そうよ。だけど順調にはゆかなかつた……株式の新規社でね、採用は一人なのに百人くらいきてるんだから。ダメだと思って、面接のときは好き勝手なことを喋つたわ。

吉江 久子 そこから『酒』編集室に通つている。吉江と久子が話しごとでいる。

吉江 ……こここの生活にも、どうやら慣れてきたよ。もう一年になるからねえ。

久子 そうねえ、私が上京したのが昭和三十年、一年経つて

吉江 あんたが上京して当分は、心配でいけんかったよ。

久子 初めは、しんどかつたよねえ。なんにも分からずに飛び出して来たんじやけえ。

吉江

そりやあ、お誂え向きねえ。(笑いながら) あんたは三歳くらいから、お酒を飲んでいたからねえ。

吉江 だつて、そのおかげで採用されたんでしょ。あら澄子

が帰ってきたようだわ。

下手の台所のほうでガタコト音をさせて、澄子が入つてくる。

澄子 食材を買い込んできたわ。お母さんだけでなく、私はで居座つてしまつて、姉さん御免なさいね。

久子 そんなこと気にしないでよ。

澄子 じやあ今夜の晩ご飯、お母さんが作ってくれる?

吉江 そりやあいいけど、まだ少し早いから、久子のお喋りをもう少し聞いてからにしようよ。いま入社のころの話が出ていているところなんですねえ。

澄子 文壇関係の話なら興味があるわ。

久子 たいしたことじやあないけど、とにかく入社してみると様子がおかしいのね。『酒』などという道楽雑誌に金を注ぎ込むのなら給料を上げろ、と言つて印刷所がストライキを始めたの。それで昭和三十一年に復刊一周年記念号を出して休刊……すると火野葦平先生が、「チャコが引き受けてやりなさい」と、おっしゃつたの。株式新聞社の小玉社長は気持ちよく譲つて下さつたし、事務所を貸して下さる方もいたわ。印刷所の社長と紙屋の主人は信用貸しで、半年ほど面倒みて下さつた。ところが雑誌は、ぜんぜん売れ

ないのよねえ。もうダメ、と諦めかけたけど「七の会」も応援してくれる、仲間も増える……金はなくとも知恵を貸してくれる人もいる。それで結局、直販形式にしたの。

澄子 なるほどねえ、姉さん憶えてないかなあ、広島図書つて会社が『ぎんのすず』という本を出してたでしょ。あれも直接販売だつたわ。

吉江 さあ、(立ち上がつて) そろそろタダご飯の支度に取りかかりましょうかね……。

溶暗

第三場

昭和三十五年一月中旬、同じ部屋。澄子は結婚して、近くのパン屋さんに間借りしている。

小堺 ……火野先生が佐々木さんのことを、ひどく気にされましてね……順調にいってますよ、と言つたんですが、変わつたことは、ありませんよね?

久子 ええ、大丈夫です。周囲はだんだん賑やかになつてきました。「七の会」のことば、存知ですか?

小堺 作家では阿川さん、桂さん、梶山さん、俳優の杉村さん、木村さん、政治評論家の藤原さん……おつと、佐々木

さんを抜かしちゃあいけない。

やあつて、三人が座つて話を始める。

久子 それが大きくなつたんです。昨年「七の会」のメンバーが広島へ帰つたとき、賀茂鶴酒造の石井武志会長や東洋工業の松田恒次社長のお世話になつたので、それ以後、毎年一回は集まろう、ということになつたんです。これが昭和二十四年結成の賀茂鶴会の発端なんですが、「七の会」のメンバーのほかには、作詞家の石本美由起さん、画家の大歳克衛さん、俳優の平幹二郎さん、女優の佐久間良子さんたちね。それまでにも飲み回つたお金は、たいてい石本美由起さんが払つていたわ。金回りも一番よかつたし、「飲みましよう」と言いだすのは石本さんだつたから……。

小堺 これだけ聞けば大丈夫です。火野先生には、この様子をお伝えしておきますよ。（腰を浮かせながら）それじやあ、お母さん、失礼します。

吉江 吉江が上手から急いで出て来る。

吉江 なんのお構いもしませんで……。
小堺 いえいえ、夕食時間にお邪魔しまして……。

三人が下手に消えると、上手から澄子が現われ、お茶の後片付けをする。吉江と久子はすぐ戻つてくる。や

吉江 有難いことですよ、火野先生にはお礼の言葉もないでしようが……。

久子 そうなのよ。私、火野先生を見るとね、お父さんみたいな気がすることがあるの。体つきも似てるもんね。ずいぶん支えになつていただいたわ。月給八千円の時代、家賃が四千五百円だから食えない生活だけど、それでも一杯三十円のコップ酒を毎晩飲み歩いたの。尾崎士郎とか壇一雄といった先生方が、談論風発するのよ。『人生劇場』の尾崎先生はね、酔うと褲の上から角帯を巻いて土俵入りの格好をするの。高いお酒なら江戸川乱歩先生ね。新橋・赤坂・柳橋などの、超一流の料亭に連れて行つて下さるの。

澄子 乱歩さんといつたら、土蔵の中に蠟燭を灯して探偵小説を書いてた人でしょ。大丈夫なの？
があつたわ。

久子 「チャコには女性的魅力度がないから大丈夫」という説に似てると言われてたでしょ。
澄子 そんなことないわよ。姉さんはオードリ・ヘプバーン

久子 それはね私がガリガリに瘦せて、髪型もボニー・ティルにしていたからかもね……。乱歩は男色趣味があるから女には手を出さない、という話もあつたわ。

澄子 なんだか薄気味悪いわねえ。

久子 ところが乱歩先生は常識的な人なのよ。学者タイプと
言つてもいいかな……心理学で使うロールシャッハ・テス
トというのがあるでしょ、あれで調べたら「正常」と出た
そうよ。

澄子 どうもイメージが合わないわね。

久子 でも、あのクラスの料亭になると、女将さんのたちの
話術もたいしたものなの。耳学問で少しは偉くなつたわ：
……でも、なんだか変ね。（急に氣になりだした風情で）どうし
て火野先生、小堺さんを立ち寄らせたりしたのかしら？

澄子 ミステリアスな感じね。……あつ、そうだ、小堺さん
はね、芥川賞候補になりそうだって話よ。森下洋子さんは
上京するそうだし……。

久子 それは嬉しいけど、私、いやな予感がしてきたわ。
吉江 つまらないこと言わないで、澄子は早く帰らないと、
お家のことがあるでしょ……。

溶暗 溶明

で、澄子のところに火野葦平の訃報が入つた、という
ことらしい。

久子 （おろおろしながら）私の聞き違ひだつたらいけないか
ら、とにかく、すぐ連絡を取つてみてよ！

吉江 おかいわねえ、二十二日の夜、火野先生と電話で話
したばかりなのよ。でも……ばかばかしいと思つて、言わ
なかつたんだけど、私、昨夜、火野先生の夢を見たの……。

吉江 あんた、顔色が悪いわ。私も氣になりだしたよ。
久子 それで、だれから電話があつたの？

吉江 じやあ、小堺さんにでも、電話してみたら？

吉江 （電話のほうに歩みながら）どうも胸騒ぎがするわ。（ダ
イヤルを回して）もしもし……、ああ、小堺さん、火野先生
お元気？

電話から漏れる声を拡大して聞かせる。小堺の声が冥
府からのメッセージのように流れてくる。

一週間後、一月二十四日の夕方。仕事から早めに帰つ
た久子が、和服に着かえていると、澄子が血相を変え
てやつて来る。久子のところの電話が通じなかつたの

小堺 澄子さんから連絡がありましたか？
久子 ええ、気になる夢も見ましたしちゃ。
小堺 そうですか、でも夢じやあないんだ。北九州若松の書

斎で……突然死された……。

久子 なんですって!?

小堺 急なことなんですね、いま相談中ですけど、突然死となれば心臓発作か脳卒中……まだ意見が纏まらないんで、あまり喋らないで下さい。

久子 あなた、なにか隠してるようね!?

小堺 いづれは分かることだとしても、出来るだけ遅い方がいい……まあから高血圧はあつたんですけどね、とにかく、葬儀のこともあるし、すぐ九州へ行きます。

久子 私、(取り乱した風情で)どうしたらいいのかしら?

小堺 来られないほうがいいかもね。

久子 どうしてなの?

小堺 ショックが大きすぎますよ。

久子 ……分かったわ……でも私、やつぱり行きます。

久子は受話器を置いて泣き崩れる。少し離れた位置で聞いていた吉江や澄子も、事情は呑み込めた感じ。

久子 火野先生が亡くなられたあと、昭和三十五年に「広島

なまりをなつかしむ会」が生まれました。この年には、まだ十二歳の森下洋子さんが、バレリーナを目指して上京しました。脱線しましたが「なつかしむ会」のメンバーは賀茂鶴会とかなりダブつていまして、三十七年までに三回ほ

人も出来たけど、諦めたわ。(いささか錯乱気味)もう三十三歳になつたんだもの。くじけちゃあいけないのよね。お母さん、それでいいかしら?
吉江 いいよ、いいよ。女の幸せは、結婚だけじゃ ain't ain't
だからね……。

第三幕

第一場

——幕——

澄子 (小声で) 私だつてショックだわ。

吉江 泣きたかつたら、泣くがいいよ。

久子 ……私、雑誌は続けるわ。結婚はしません。五年まえに広島を出るとき、結婚はしないことに決めたの。好きな

久子 (小声で) 私だつてショックだわ。

吉江 泣きたかつたら、泣くがいいよ。

久子 ……私、雑誌は続けるわ。結婚はしません。五年まえに広島を出るとき、結婚はしないことに決めたの。好きな

ど集まっています。メンバーの梶山季之さんは、仲間内では「カジさん」と呼んでいましたが、昭和三十八年度前期の直木賞候補になりました。結局、受賞を逸したので、ひどく残念がっていました。雑誌『酒』が売れ出したのは創刊の後七年目、昭和三十年代も終りに近くになつたころですが、三十九年の二月には、尾崎士郎先生もお亡くなりになりました。でも仕事の方では(ゆっくり下手へ向かって歩き、北陸・東海の下あたりで停まる)四十二年に、幻の酒と言われた新潟の「越乃寒梅」を見付けました。これが機縁で地酒

ブームが起こり、雑誌『酒』の名も広がりましたし、酒や肴についてのエッセイを書くようになりましたが、私が一番お伝えしたかったのは、お酒を作る人たちのことでござります。ほら一人、年配の方が来てらっしゃいますね。あの人、俳句もなさるんです……。

下手から鉢巻に印^{じる}衿纏^{はんてん}をまとつた、年配の杜氏^{とうじ}が登場。土井という名で、久子の眼前まで来ると、鉢巻をはずし肩に掛け、腰を折つて挨拶する。

止めて下さいな。(ゆっくり下手へ歩いて行く)新聞なんかでエッセイストなんて肩書きを付けたのがあります。私は皆さんのお話を聞いて、日本酒のよいところを、宣伝をしているだけですから。

土井 有難いことです。

久子 その日本酒造りで一番大切な要は、酒造り職人の蔵人^{くらびと}を束ねる杜氏^{とうじ}さんなのよね。「おやつさん」とか「おやじさん」と呼ばれる人たち……お話しを聞いてると、教えられことが多いの。

土井 でも、ほんものの杜氏は、少なくなつてきました。コンピューターを使って、一年中、一定の品質を保つことが求められてるんで、麹^{こうじ}や醪^{もろみ}と話しながら、生き物相手の勘でやってるわしらは、いずれ消え去るでしょう。

久子 寂しいことを言わないでよ。私だって時代の流れが分からぬ訳じやないわ。だけど、痺れるほど美味しいお酒は、機械製じやないの。猿がコンピューターを叩いても名句の生まれる可能性があるそうだけど、そろばつかりも言えないわね。

土井 はい、おっしゃる通りで……。

久子 私ねえ、いま北から南に向かって酒蔵行脚をしてるんです。旭川は、北海道の灘ですねえ。北日本は塩辛い味、西日本は薄味で、九州になると甘くなる。もちろん、これ

久子 先生、お久しううございます。取材に来られるとかで、お迎えに参りました。荷物は私がお持ちしよう。

は一般論で、それぞれ別の味を出していらっしゃる。……
造り酒屋の御主人は資金と蔵を提供して、杜氏・蔵人に酒
を造つてもらつていきました。米を作る人の一部が季節的に
蔵人になり、米と酒は一連のものだつたんですね。それが
機械化され、社長と社員になつて……どうも面白くないわ
ね。合理化とか、効率化というのは、文化を壊すのよ。私
俳句を作つたり、横道にそれで道草をくいながら行きます
から、先に帰つといて下さい。

二人は下手へと歩いて消えるが、杜氏の土井はすぐ舞
台に引き返し、観客に告げる。

土井 佐々木久子先生の口癖をお伝えしておきます。……日
本酒は、あくまでも燗をして飲むもので、冷酒はダメだ、
ということです。それから先生の俳句、（メモを取り出しなが
ら）一月から十二月まで十二句を披露させて頂きます。

味の旅 行きつく先は あなた寿司
短夜は 心つきあふ 酒縁なり
酔い泣きの 酒くむ今日は 原爆忌
木曾の秋 地酒のさかなは 手打そば
天高し 鯉おどる夜の 美し酒
寒き夜を 燭あつくして ひとり酒
凍雪を 踏んで情の 旅をゆく

告げ終わると土井は下手に消え、中幕の日本列島も消
すと、上手から久子がよろよろと現われる。舞台中央
に、スポットライトに当たられた久子が立つ。

久子 土井さんたちが造つた美味しい酒を頂いて寝たのに、
悲しい夢を見てしまつたわ。血みどろの梶山季之さんが、
助けを求めてる……なにかあつたのかしら？

溶暗

第一場

酒徳ある 人とすごさん 松の内
雪割りの 酒酌む旅は 艷だちて
流し離 抱いてにつこり 嫁御寮
花と人 心寄せあふ 嬉かな
緋鯉舞ふ 日を待ちもせず 君は逝き

昭和五十年十一月末、東京のホテル。広島カープの優
勝を祝う賑わい。「七の会」など、ゆかりの連中が集ま
つている。阿川弘之と藤原弘達が、グラスを片手にし

て、和服姿の佐々木久子のところにやつて来る。

阿川 チヤコちゃん、おめでとう。

藤原 万年最下位のカープが優勝するとはなあ、君たちのおかげだろう。

久子 ええ、とつても嬉しい。でも、ちよつとだけ悲しい。

藤原 カジさんに見せてやりたかったのう。

阿川 彼が香港で客死したのは五月十一日だから、半年のこ

とだつたのになあ。

石本 (話に加わりながら) 吐血だから飲み過ぎだろう。

久子 そうねえ、カジさんのお通夜には、ゴールド・カモヅルが数十本届いていたわ。(石本に) 先生も気をつけなきやあ……。

石本 よう一緒に飲み歩いたけえのう。じゃが、わしやあ、チヤコちゃんほどは飲んどらんぞ。

久子 最近は、回数で言うと先生のほうが多いでしよう。

石本 まあ、「広島東洋カープを優勝させる会」を引きずつていつたのは君とカジさんだよなあ。カープ球団が誕生したときは、僕はもう上京していたが、君たちは樽募金で球団

が誕生したころからのファンだつたわけだ……。

久子 カープの日南キャンプを訪問したのは、昭和四十一年の二月で、石本先生にカジさん、漫画家の富永一朗さん、

落語家の三笑亭夢楽さん、それに私。

藤原 そして七月に、「広島カープを優勝させる会」を立ち上げた、というわけだね……。

阿川と藤原は話しながら場所を変え、桂芳久が加わり、人の移動は激しくなる。

桂 カジさんが死んだから、「七の会」では僕が一番若くなつた。彼が、あれだけ大量の作品を書くとは、思つていませんでしたよ。佐々木さんもたいした仕事をされましたが、

『酒』の編集長になつてしまふまで、もう三十歳を過ぎてからも、二十歳くらいにしか見えなかつた……。

久子 チビでヤセで、洗いざらしの時代遅れの洋服を着ているから、余計、幼く見えたのね。成熟した女の魅力なんかないんだから、もつぱら和服を着ることにしたのよ。ひどく貧乏だつたときも、新宿の末広亭へ、落語を聴きに通いつめてたし……土着の日本文化への憧れ、そんなものが、あつたのかな。

桂 なるほど、酒、カープ、伝統芸能……なんだか一本、筋が通つていて素晴らしい。

久子 桂さんだつて、三田文学会の理事になられたし、北里大学教授だとか、学者になられたのよね。

桂 文学的には、阿川さんに遠く及ばない。『中国新聞』で原

爆文学論争があつたとき、総括をされたのは阿川さんだつたよね。学者ということになると、藤原さんが大先輩に当たります……。

カープの応援歌が流れてくる。そこへ木村功がやつて来て、桂芳久と並ぶ。

木村 なんだか高尚な話をしているようだが、『酒』の中で面白かったのは「文壇酒徒番附」かな。昭和四十年ごろに出たでしょ!?

久子 新年特別号の附録です。東は横綱が井上靖先生、大関が高橋義孝先生、(指を折りながら) 関脇が永井龍男さんで山口瞳さんの小結。西の横綱は河上徹太郎先生、大関は檀一雄さんで、吉行淳之介さんの関脇に小結のカジさん……。桂さすがに、よく憶えてますね。だけど、僕も記憶力はいいほうなんです。読売テレビは、正月に「女流酒豪番付」をやつしていました。こっちの「番付」はコザトヘンのない「付」だ。簡単な字を使ってましたね。

木村 (ふと下手のカウンターの方を見て) ありやー、杉村春子さんが来てらっしゃる。

久子 あら、そうねえ。私、二挨拶に行つてくるけど、あなたが来てらっしゃる。

たたちは?

木村 僕も行かなきやいけないな。文学座のボスだし、日本を代表する女優だから。僕は俳優座だけど、いろいろ不義理してるので、すぐ失礼したいんです。桂さん、ちょっと待つてくれる?

桂 そりやー、まあ構いませんけど、ちょっと一回りして、食べ物でも取つてこようかな……。

久子と木村は、カウンターの止り木に座つていた杉村に挨拶する。

木村 どうも、ご無沙汰しまして……。

久子 お忙しいのに、有り難うございました。

杉村 盛会でよかつたわね。仕事の途中を抜け出して来たん

だけど、あなたたちに会えたから、義理はすんだ……。

木村 じゃあ僕、失礼します。

杉村 (ほつほつ笑つて) 無理しなくていいのよ。

木村が逃げるようになると、久子が杉村の隣に座つて訊く。

久子 なにかあつたんですか?

杉村 たいしたことないのよ。私は青山杉作先生に落第点を

付けられたけど、彼は俳優座で青山先生から演技指導を受けた。それから俳優座を出て青年俳優クラブを立ち上げた

んだわ。そんなことを気にしてゐるのかな。のちの劇団青俳……岡田英次さんや西村晃さんと一緒にね。ところが最近、

経営状態がよくないの。それで、ちょっとばかりね。

久子 映画に出てらっしゃるのは、そのせいですか？

杉村 それだけじゃなくて、新劇人も映画へ進出すべきだ

というポリシーも持つてゐるようだけど……。

久子 あの人実家は戦前の千田町で、近くなんです。私の

母は芝居好きで、今でも市川雷蔵さんが好きなんですが、私も若いときは青年団で芝居をやってたんで、近親感がありましてね、「罪と罰」のラスコルニコフなんか好きでした。

映画では『真空地帯』のすねたような兵士……。

杉村 そうだったの。じゃあ、なにかの折には、支えになってあげてよ。私はそろそろ失礼するから……。

背後にカープの応援歌が流れている。

暗転

昭和五十六年七月五日、久子の家、吉江も同居。以前よりは少し綺麗な内装。澄子も来ている。

吉江 来年はお父さんの三十三回忌になるよう。今日は身

内だけでお経をあげたが、来年は正覺寺住職の徹照さんに来てもらうて、ちゃんと法事をせんにやあいけん。

久子 そうねえ、徹照住職にお願いするんだつたら、早めに連絡しとかなくちやあね……あの人、売れつ子だから。

吉江 いい説教をされるからう。私が死んだら枕経をお願いします、と頼んであるけど……。

澄子 死んだ人の枕元で読むお経のことね、だつたらお母さん、そんな話をするのは、まだ早いわよ。

吉江 ボケんうちに、ちゃんと準備をしとかんとなあ。

久子 私だつて、澄子だつて、いつボツクリいくかも分からんけどね。私ねえ、また人が死ぬる夢を見たの。つい先日、火野先生の突然死は、病気じやあなくて自殺だつた、といふ話を聞いたのが原因かもしね。

澄子 まさか、私が死ぬるんじやあないでしようね？

久子 そりやあ違うわ、俳優の木村功さんなの。お母さんも芝居が好きだから、憶えてないかしら、千田町出身で俳優座に入つた人……。

吉江 うん、映画で見たよ。『七人の侍』に出でいた。

第三場

澄子 俳優座から出て、劇団青俳を作つたけど、二年ほどま

えに倒産したわね。

久子 それでね、彼は木村功演劇事務所というのを作つて、

態勢を立て直そうとしているの。その第一回公演がウイリ

アム・ギブソンの「ツー・フォア・ザ・シーソー」……末

木利文の演出で、相手役は高林由紀子。『一人でシーソー』

という題で、去年の十二月には、広島でも上演したんよ。

広島市民劇場という演劇鑑賞組織の、例会での公演だけど

ねえ……ところが、その木村さんが、手を振つて消えて行

くの。夢の中ですね。

澄江 枕元に立つ、って言う、あれかね。でも、逆夢つて言

葉もあるでしょ、いいことがあるかもしけんけえ、まあ考

え込まん方がいいわ。

久子 そうねえ。でも私、昔からカンの強い子だったでしょ、

予想外に私のカンは当るのよ。なにかが起ころう……。

すると電話が鳴り、三人は顔を見合わせる。不吉なム

ード。久恵が電話に出る。

久子 はい、佐々木でござります。……え、木村さんが、

お亡くなりになつた……。

電話の声 （遠くて吉江や澄子には聞こえない） ……。

久子 ……明日、密葬……
電話の声 ……。

久子 ……はい、分かりました……

重苦しい雰囲気の中、電話を切つた久子が一人のところに戻つて来る。

久子 杉村さんからだつた。昨日、突然死だつたらしいの……

葬儀は明日、ごく内輪で済ますんだつて……。

吉江 杉村さんなら、よう知つとるよ。石山春子さんいうて、

いまの土橋から河原町あたりに家があつての。当り役とい

えば、『女の一生』の布引けい……。

久子 （調子を合わせるように） そうねえ、私なら、『欲望とい

う名の電車』のブランチ・デュボアを探るかなあ。

澄子 （怪訝な顔をして） 亡くなられたのは、木村功さんじや

あないの？

吉江 ああ、そうだつたの。木村さんなら、あそこは、ご両

親が原爆でお亡くなりになつたよ。

久子 そだつたわねえ。でも、あの人は原爆には遭つてい

ないはずよ。海軍に行つてたから……。

吉江 そうかい、そりやあよかつたね。だけど人間は、みんな死ぬるんだよ。御文章の『白骨の章』に「我やさき人や

さき、けふともしらずあすともしらず」というところがあるでしょ。それじやあ私、お経を唱えてきますからね。

仏間へ行くのか、吉江は上手へ消える。

澄子 ……お母さん、ちょっと変じやあない？

久子 そうなの、去年からボケ症状が出だしたような気がするの。テレビに向かつて挨拶したりね。でも、お経は間違えないのよ。

澄子 八十歳なんだから、仕方ないのかなあ。私たちの家は、四百年來の浄土真宗の門徒だつたわね。

久子 そうよ。でも、お母さんの仏教は、法事や葬式のためのものじやあなくて、苦しい日々の生活に必要なものだつたんだわ。

澄子 そうねえ、親鸞聖人ファンというところかねえ。たいでい宗教には、男女格差・女性蔑視みたいなものがあるでしょ。ところが、の方にはそれがないのよね。お母さんによつては、それが救いだつたんじやあないの？

久子 女人正機とか女人往生というのは、女性を認めているわけね。「善人なほもて往生をとぐ、いはんや悪人をや」という悪人正機説は、善人と悪人の差別もしないんだから、すごい人だわ。

澄子 ボケる人もボケない人も、酒飲みも下戸も差別しない、つてことですか。（笑い）

久子 きっと、そうね。いつかは私もボケるけど、広島カープを優勝させることも出来たわ。日本酒を洋酒に負けさせちやあいけないのよ。私は飲む酒も、雑誌の『酒』も続けられるわ。それが私の生涯なんだもの。

――幕下り――

* * * * *

この戯曲では、ヒロインの佐々木久子と故人となられた文壇関係者を除き、原則として変名を使いました。

ちなみに、清種徹宵師のモデルは清胤徹昭師であり、正式に第十九世住職を継承されたのは昭和五十九（一九八四）年ですが、戯曲の構成上、長光山正覚寺の本堂が鉄筋製に建て替えられた昭和四十二年以後は、住職と呼びました。

なお、ボケという言葉は差別用語として非難されるかも知れませんが、この言葉の出てくる昭和五十六年には、いま一般化している「認知症」という用語は使われていなかつたので、その点はご了承下さい。